

日本英語教育史学会 会報

272

2015 年 12 月 15 日

発行人 日本英語教育史学会 (代表: 江利川春雄)

事務局 〒120-8551 東京都足立区千住旭町 5 番

東京電機大学工学部英語系列 河村和也研究室

tel: 03-5284-5641 fax: 03-5284-5699

e-mail: membership@hiset.jp

会費納入口座 (名義人: 日本英語教育史学会)

ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873

三菱東京 UFJ 銀行千住中央支店【普通】0997182

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan

日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

学会公式ウェブサイト: www.hiset.jp

第255回研究例会報告

2015 (平成 27) 年 11 月 15 日 (日), 東京電機大学 (東京都足立区) において第 255 回研究例会が開催されました。参加者は 29 名でした。

はじめに第 4 回英語教育史入門セミナーが行われ, 田邊祐司氏 (専修大) が「日本英語音声教育史への誘い: 日本人は英語音声教育にどう取り入れてきたのか」というテーマでお話しされました。続いて小田勝巳氏 (工学院大学) を指定討論者に迎え, 「自著を語る」として川嶋正士氏 (日本大) による「学習英文法における逆欠如現象: 川嶋正士著『5 文型』論考—Parallel Grammar Series, Part II の検証』を素材に」の発表が行われました。司会は佐藤恵一氏 (工学院大学 [非常勤]) でした。以下に参加者の感想を掲載しますのでご参照ください (①は田邊氏, ②は川嶋氏及び小田氏の発表への感想です)。

◇ ◇ ◇

◆①音声学を楽しく学べ勉強になりました。先生のこれまでの音声学との関わりや, また質疑応答の中で島岡先生とのお話も大変興味深かったです。

国際共通語としての英語が叫ばれる現在だからこそ, 言葉と文字の関わりを意識し, 求められる音声をしっかり身につけることの重要性を感じました。やはり入門期に教える際には音声変化やプロソディをある程度学ぶべき必要があると改めて感じました。ありがとうございました。 (K.S)

◆①私の普段の勉強で英単語で発音と綴りが違うものが出てくると, 綴りにそって自分なりの読み方にして覚えてしまうので正しい読み方が分からなくなってしまうことがあります。さらにリーディングなどの教材で CD 付

きの物でも, 聴くより読む方が先になってしまいがちで, 改めて自分の勉強方も, 見ることに重点を置きすぎると感じました。

冒頭で流れた英文が聞き取れず, 日本人が発音する英文の方がなんとなくわかってしまった自分に悔しかったです。 (北島あすか)

◆①田邊先生の音声学のご発表は英語音声学の文献の深読みの解説から始まりました。ご本人は「現場主義」であると言われておりましたが, その範囲はたいへん広いものと思います。関連文献も多く掲げて下さいましたが, その中で拙書も 2 点挙げていただきました。現在 SKT をやっている関係で現場主義的観点から, acoustic の精密表記法を質問しました。[u:] より [uu] を用いた方が良いのでは, など話し合えて有意義でした。 (島岡丘)

英語教育史入門セミナー (第 4 回)

日本英語音声教育史への誘い：日本人は英語音声教育をどう取り入れてきたのか

田邊 祐司 (専修大学)

今回は私の30有余年にわたる英語音声教育史の研究を50分間に凝縮してお届けしました。

冒頭で、このマイナーな(?)領域に足を踏み入れるきっかけを紹介した後、研究から浮かび上がった"ビッグ・ピクチャー"を提示。音声指導は変則式教授法が主流となる中、傍流であり続けたこと、音声に関する研究はその記述に力点が置かれ、指導・学習面に関する研究が不十分だったこと、さらには教師中心の"教え込む"指導技術が流通し、第二言語音声習得の本質を踏まえた指導が未発達であるといった傾向が確認できることを述べました。最後に「グローバル人材育成」のかけ声の下、次の十年を彩る"4技能統合型"、"Active Learning"などの指導理念にいかにか音声指導の内容と手法を摺り合わせるのか、という直近の課題に関して、歴史が示唆に富む"データ"を提供してくれることを述べ、講座を終えました。

入門講座の主旨は若い方々に歴史研究の意義を伝えるというのですが、研究の道程を振り返ることは私にとっても良い刺激となりました。これを契機にここまで積み上げてきたものを整理し、何らかの形で発信するという思いが芽生えました。機会を与えていただいた会長、理事の諸先生方、また粗い話にお付き合いいただいた聴衆の皆様にお礼を申し上げます。



◆①明治以前から現代にかけての音声教育史の概略を学ばせていただきました。特に、直感・模倣的アプローチと言語・分析的アプローチに対する批判に興味深く拝聴しました。教師主導の習慣形成的あるいは言語学的なアプローチとは別のアプローチ 1 つのとして、日本人が古くから親しんできた「カナ」を活用した母語活用・比較的アプローチがあるのではないかと考えました。アクティブ・ラーニングや ICT 教育の充実が叫ばれる中、音声教育がどうあるべきかを考えさせられました。貴重なお話ありがとうございました。

(上野舞斗)

◆①田邊先生のご発表は、先生が音声教育史を学ぶようになった経緯から始まりました。大学院時代の出来事、恩師や高校教師をされていた際に出会った生徒からの影響と、今現在私たちゼミ生に様々なことをご教授してく

ださる先生の、ルーツのようなものを知ることが出来ました。それから、先生が実際に作成していらっしゃる音声教育の年表を見ることが出来ました。現時点の私は英文科に所属しているにも関わらず、音声教育、英語教育について十分な知識がありません。英語を学ぶ身として、目先の 4 技能だけにとらわれてはいけなと感じました。英語の歴史までしっかり学べて初めて、英文科と言えるのではないかと思います。私も、本学会を通して学んだことから始めて、自分なりの年表を作成してみようと思います。(Starlight)

◆②川嶋先生には 5 文型について深い研究成果をうかがいました。7 文型 (there の存在文と let+VO) の主張もあるのではないかと素人的質問をさせていただきましたが、きちんと雄弁に答えていただきました。その後懇親会では、幅広い話題に楽しく過ごしました。

<発表を終えて>

川嶋 正士 (日本大学)

まず、発表に際して司会をして頂いた佐藤恵一副会長、指定討論者の小田勝己先生並びにご参加頂いた皆様にご心より感謝致します。無我夢中で著した本著が出版されたのが2月末であり、多くの方よりコメントを頂き始めたのが初夏の頃でした。江利川会長より今発表のお誘いを頂いたのもその頃です。著者の未熟で至らない点をご批判いただくよい機会であると思い、謹んでお受けしました。精一杯準備を重ねたつもりでしたが、意気込みばかりが空回りして、発表時に伝えたいことがどの程度伝わったか定かではありません。しかし、発表は私にとって意義深いものでした。小田先生からは、教育学的観点から発表者より詳しい提案をいただきました。「5文型」研究が様々な方向に発展可能性を持つことをして頂いた好事例であると考えます。島岡丘先生をはじめフロアの皆様から頂いた質問やコメントも有益でした。学習英文法における逆欠如の典型例である「5文型」の研究は端緒についたばかりであり、今後も史的側面のみならず様々な分野で研究課題が山積しています。今は錨を上げただけの段階で、どこに漂うのかも定かではありませんが、この発表を糧に日本英語教育史学会の皆様の指導を仰ぎながら更なる研究にいそしみたいと考えます。



懇親会には大学院に合格したばかりの若手も参加してくれて、この学会が将来発展していくことを感じました。(島岡丘)

◆②川嶋先生のこれまでの研究成果が現れた本と思います。特に文法史に留まらず文化や思想とも根付いた幅広い視点がすごいと思いました。また本日のお話を伺い、川嶋先生のこれまでの研究の深さを感じるお話でした。

討論者としての小田先生のお話も、機械的な作業ではなく子供の内発的な動機を重んじる思想が故に関連付けたのも面白いと思いました。

いずれにしても研究者としての川嶋先生の姿勢を感じる良いお話でした。今後は更に日本の教科書での5文型についてもお話しいただけると幸いです。ありがとうございます。(K.S)

◆②一番の苦手科目だった英語を好きな教科に変えてくれたのが「5文型」との出会いであった私にとっては非常に興味深いご発表でした。5月の大会でも関連内容を伺いました

が、5文型を分類したとされる Sonnenschein 自身が”Advanced English Syntax”をなぜ書かなかつたかなど川嶋先生の研究内容について更なる関心を持つ機会となりました。

(上野舞斗)

◆②高校生の時にとにかく覚えさせられ、小田先生が紹介されていた例文のような複雑な英文や長い文を理解する上で5文型はとても大切だと思っていたので、消滅と聞いた時は驚きました。しかし、言語、場合によっては重要であったり、そうでなかったりするのだと分かり非常に勉強になりました。

(北島あすか)



< 発表を終えて >

小田 勝巳 (工学院大学)

川嶋正士先生が御著書で提起された問題を、私は今回「内在的根拠」という分析視点を使ってみました。テーマがとても深いので、あえて、1 つの分析枠組みで見ようと思いました。私は、日本の英語教育者が 5 文型にこだわってきた理由として、英語文献を正確に読み解く必要性が明治以来、教師のオブセッションになっていたのではないかと考えます。

個人的なことになりますが、私は昔、官庁に勤めていたころ、英語で書かれた文献のなかには本国人のなかでのごく一部の人にしか読めないような難解な構文と言い回しで「意図的に」書かれていると教わりました。日本の英語教育は海外知識吸収が「内在的動機」になっているような気がします。今回の私のコメントは、日本の英語教育史におけるそのような内在的動機が 5 文型を中心とする英文読解学習と相性がよかったのではないかと、という点を中心に述べました。



◆②川嶋先生のご発表は、とても興味深いものでした。個人的に文法は嫌いではないので、5 文型という高校時代がつり勉強したことに関するお話を、学会の場で聞くことが出来たのは大きな収穫となりました。先生はご発表前、ゼミ生に 5 文型が言えるか、どういう覚え方をしたかと尋ねられました。私は実際まる覚えしましたが、5 文型を割と楽しんでやれた方なので苦ではありませんでした。しかし、英語自体や文法が嫌いな人にとっては

辛いのだろうという気持ちも理解出来ました。文型は順番よりも動詞の後に何が付加されるのかということの方が重要だということや、表で 5 文型を考えてみるということなど、先生のお話は私にとって新しい発見だけでした。

今回は、音声と文法という英語の基礎となるお話を聞くことが出来ました。知識の乏しい私は、もっともっと精進していこうと思います。
(Starlight)

>> 事務局より

会員のみなさまには、会費の納入にご協力いただきありがとうございます。未納の方へのご案内が遅れておりますが、順次お届けいたしますので、引き続きのご協力をお願い申し上げます。

なお、ご不明の点は、お手数ですが事務局（会計担当）までお問い合わせくださいますようお願いいたします。

問い合わせ先 事務局（会計担当）河村和也

電子メール：membership@hiset.jp 携帯電話：090-3437-1703

》 英語教育史フォルダー

- ◆河村和也 秋田テレビ『秋田人物伝：河村重治郎』（2015年11月28日13時00分～13時55分）に出演

》 2015 年度 研究例会の予定

研究例会は1月を除く奇数月の「第3日曜日」に開催します。

- ◆第256回研究例会 2016年1月10日（日）東京都で開催予定
→詳細はウェブサイト，ならびに本号 pp.3-4 に詳報
- ◆第257回研究例会 2016年3月20日（日）四天王寺大学あべのハルカスサテライトキャンパス（大阪市阿倍野区）で開催予定
→詳細はウェブサイト，ならびに「日本英語教育史学会会報」273号にてお知らせします。

研究例会での発表希望者は，(1) 発表希望月，(2) タイトル，(3) 発表概要(100～200字程度)，(4) 使用予定機器，以上の4点を明記の上，発表希望月の前々月10日（3月発表希望であれば1月10日）までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

EDITOR'S BOX 今年もうすぐ終わりですが、みなさまにとってはどんな1年だったでしょうか。私は卒論指導や修論指導も加えれば前期が10コマ、後期が11コマ（1コマ90分）と、ひたすら授業をすることに追われた1年になりました。非常勤の先生方には「なんだそのくらい」と笑われてしまいそうですが……。ただ、そんな状況の中でも、自分がこの10数年間ずっとやりたいと思っていたことになんとか取り組めて、それが何とか形になりそうな見通しが立ってきたことは、今後にとって少し自信になりそうです。来年は皆様にとってさらによい年になりますようお祈りしております。（若）

© 日本英語教育史学会会報編集部（秋田大学 若有研究室 geppo@hiset.jp）

第256回 研究例会のご案内

日 時：2016年1月10日（日）午後2時～

会 場：東京電機大学 東京千住キャンパス（東京都足立区千住旭町5番）
1号館 10224室〔1224セミナー室〕

◆入館に際しては入館証が必要です。正面入口にて学会役員よりお受け取りください。

参加費：無料

問合せ先：東京電機大学 工学部 英語系列 河村研究室（河村和也）

メール：reikai@hiset.jp 電話：03-5284-5641

◆研究例会はどなたでもご参加いただけます（予約不要）。

◆例会終了後に懇親会を行います。こちらにも奮ってご参加ください。

研究発表

師範学校生による小学校英語科教育実習：明治末年における一事例

竹中 龍範 氏 (香川大学)

【概要】 師範学校における英語科について、明治 40 (1907) 年に選定された「師範学校規程」に「英語ハ普通ノ英語ヲ了解スルノ能ヲ得シメ智識ノ増進ニ資シ兼テ小学校ニ於ケル英語教授ノ方法ヲ会得セシムルヲ要スノ英語ハ発音、綴字、読方、訳解、書取、会話、作文、習字及文法ノ大要ヲ授ケ且教授法ヲ授クヘシ」と規定されている。本発表では、英語教授の方法に係る授業のうち、宮城県師範学校生徒が明治末年に附属小学校で行った実習について、その指導案を分析することで小学校の英語科教育実習の実相に迫りたい。

自著を語る

歴史研究の観点から見た『「日本人と英語」の社会学』

提 案 者： 寺沢 拓敬 氏 (日本学術振興会／東京大学社会科学研究所 特別研究員 (PD))

指定討論者： 拝田 清 氏 (四天王寺大学)

【概要】 拙著『「日本人と英語」の社会学—なぜ英語教育論は誤解だらけなのか』(研究社、2015)を素材に議論する。本書の分析のほとんどが 2000 年代以降に集められたデータをもとにしており、その点で歴史研究ではない。しかしながら、分析枠組みや理論の面では英語教育史研究と共有している部分も少なくない。当日は、この共有部分を議論の中心に据えたい。

【会場案内】 (東京電機大学ウェブサイトより)



【交通案内】 JR 常磐線・東武スカイツリーライン・地下鉄日比谷線・地下鉄千代田線「北千住駅」東口 (電大口) 下車徒歩 1 分